

女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力との関連 (2)

伏見 友里¹⁾ 井森 澄江²⁾

Identity Status and Social Problem Solving Undergraduates (2)

Yuri FUSHIMI Sumie IMORI

要旨

本研究は、大学生の自我同一性地位を探ること、またその自我同一性と社会的問題解決との関連を明らかにすることである。対象は73名の女子大学生。フェイスシート、自我同一性地位、SPSI-R (Social Problem-Solving Inventory-Revised) などからなる質問紙を実施した。1年間の成長を検討するために、大学最終学年の進級時と卒業時の2回調査を行った。

その結果、自我同一性地位の分析から、73名中44名 (60.3%) がD-M中間地位と判定された。SPSI-Rとの関連では、合理的問題解決 (RPS) においてA-F中間地位と同一性拡散地位との間に有意な差がみられた。

進級時から卒業時に自我同一性地位が変化していたものは25名であり、残りの48名は進級時と卒業時が同様であった。これにより、ライフイベントごとに自我同一性地位が変化する可能性が示唆された。

キーワード：自我同一性地位 女子大学生 SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised)

問題と目的

Erikson の心理社会的発達段階において、青年期は同一性の獲得が心理的課題とされている時期であり、Erikson¹⁾ (1959) は個々の若い人たちの心を悩ませているのは、職業に関する同一性を最終的に固めることができないということであると述べている。また、乳児期以来、漸次形成されてきた多数の同一化群が青年期において社会的役割の獲得において中心的位置を占めるものが職業決定であり、アイデンティティの拡散、危機は職業決定の不可能という形であらわされるとしている (Erikson²⁾, 1959)。これらのことから、青年期における自我同一性の形成にはその時期に行われる職業選択、職業決定が密接に関連している。

Marcia³⁾ (1966) は、危機の乗り越え方を、

自ら真剣に考え、責任を引き受けられる形で自分のアイデンティティを選択している統合志向 (① Achievement)、人生のいくつもある選択肢から1つを選ぼうと奮闘するモラトリアム (② Moratorium)、親や教師、年長者の価値観を鵜呑みにしているフォークロージャー (③ Foreclosure)、いくつもの選択肢を目の前にして、その中から1つを選ぶことができず、途方にくれている拡散 (④ Diffusion) の4つに分類した。

加藤⁴⁾ (1983) は Marcia (1966) が仮定した、自我同一性を規定する2つの心理社会的要因である「危機 (Crisis)」および「自己投入 (Commitment)」を基に、同一性達成地位 (① Achievement)、権威受容地位 (② Foreclosure)、積極的モラトリアム地位 (③ Moratorium)、同一性拡散地位 (④ Diffusion)、同一性達成-権威受容中間地位 (⑤ AF 中間地位)、同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (⑥ D-M

1) 東京家政大学人文学部教育福祉学科

2) 東京家政大学人文学部教育福祉学科発達心理研究室

中間地位)の6つに同一性地位を分類した。この研究では、各々の時点における危機および自己投入の水準と現在の同一性地位との関連、また性差による検討が行われ、女子においては大学に入った頃の危機および自己投入の水準が、その後の同一性地位と密接に関係するとされた。

そこで、本研究では国家試験受験に挑戦したり、就職活動を経験した大学4年の女子学生が自我同一地位、社会的問題解決をどのように変化させたのか、4年進級時と卒業時の2時点の質問紙調査結果の分析から検討を行う。

本報告の具体的な目的は、以下の通りである。

1. 進級時と卒業時の自我同一性地位の変化を検討していく。
2. 自我同一性地位とSPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised)との関連を検討していく。
3. 女子大学生の進学理由および在学理由について検討していく。
4. この1年での成長について検討していく。

方法

1. 対象者：首都圏A女子大学73名（4年進級時と卒業時の両時点で協力の得られた学生）
2. 実施時期：①2016年3月下旬、②2017年3月下旬
3. 実施方法：①4年進級オリエンテーション終了後、②卒業懇談会終了後、協力が得られた学生に質問紙を配布し、その場での回答を依頼し回収をした。
4. 質問紙の構成：フェイスシート、段階評定尺度項目、自由記述項目からなる。
 - (1) フェイスシート（年齢、家族構成、現在の居住形態等）
 - (2) 評定尺度項目：6段階尺度項目—自我同

一性地位判定尺度12項目（加藤⁴⁾，1983）。

5段階尺度項目—SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised) 39項目（中澤ら⁵⁾，2007）、ARS (Affective Relationship Scale) 愛情の関係尺度12項目（高橋⁶⁾，1990，2004）。4段階尺度項目—IPA (Inventory of Peer Attachment) 25項目 (Peer) (Armsden&Greenberg⁷⁾，1987) (①のみ)、2件法—QOSL (Quality of Student Life) 32項目（中澤ら⁵⁾，2007）。

- (3) 自由記述項目：希望進路、大学での取得予定資格、1年間の目標、一番つらかったこと、嬉しかったこと、大学進学理由および現在の在学理由 (①のみ)、1年で成長したこと (②のみ)、ライフキャリアレインボー (②のみ)、実習体験の有無 (②のみ)、等。

本報告では、1) 自我同一性地位判定尺度、2) SPSI-R、3) 大学進学理由および現在の在学理由、4) 1年で成長した点について取り上げる。

1年間の目標、1番つらかったこと、嬉しかったこと、ライフキャリアレインボーについては、井森ら⁸⁾ (2018) を参照。

- 1) 自我同一性地位判定尺度（加藤，1983）

加藤（1983）によって作成された同一性地位判定尺度12項目を用いた。各項目について、「6. 全くそのとおりだ」から「1. 全然そうではない」の6段階評定で回答を求めた。この尺度は、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入への希求の3つの変数から、加藤の分類に従い、同一性達成地位 (Achievement)、権威受容地位 (Foreclosure)、積極的モラトリアム地位 (Moratorium)、同一性拡散地位 (Diffusion)、同一性達成—権威受容中間地位 (AF 中間地

表1 自我同一性地位定義(加藤(1983)より)

自我同一性達成地位判定尺度項目	
同一性達成地位	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
権威受容	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者
A-F中間地位 (同一性達成-権威受容中間地位)	中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
積極的モラトリアム	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者
同一性拡散	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者
D-M中間地位 (同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位)	現在の自己投入の水準が中間程度以下の者のうちで、その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くはないが、将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者

位)、同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (DM 中間地位) の6つの同一性地位を判定した。各地位については、表1に示す通りである。

2) SPSI-R (中澤ら, 2007)

D' Zurilla, Nezu, & Maydeu-Olivares⁹⁾ (2002) によって作成された社会問題解決に関する尺度 SPSI-R52項目を677名の大学生に実施し、得られたデータに基づいて因子分析を行い再構成された39項目からなる尺度 SPSI-R(中澤ら, 2007)を使用した。この SPSI-R (中澤ら, 2007) は、問題定位と問題解決方略の2つに分かれ、問題定位とは、問題に対する個人の考えや評価、感じ方を反映した認知-感情スキーマを含み、社会的問題解決における動機づけ機能を担っている。問題解決方略は、個人が問題を理解し、効果的な解決もしくは問題を対処する方法を見つけるスキルを指す (D' Zurilla et al, 2002)。問題定位として、肯定的問題定位 (PPO: Positive Problem Orientation) 「難しい問題に直面している時、一生懸命やれば自分でそれを解決でき

ると信じている」等の3項目、否定的問題定位 (NPO: Negative Problem Orientation) 「難しい問題に出会うと、とても混乱する」等の9項目、問題解決方略として、合理的問題解決 (RPS: Rational Problem Solving) 「何かを決める時、それぞれの解決策のもたらす結果を考え、それらを互いに比較する」等の19項目、衝動/不注意型問題解決 (ICS: Impulsivity/Carelessness Style) 「問題を解決しようとする時、頭に思い浮かんだ最初のアイディアにしたがって行動する」等の4項目、回避的問題解決 (AS: Avoidance Style) 「自分で解決しようとする前に、まず問題が自然に解決するかどうかを待ってみる」等の4項目の合計39項目からなる。各項目について、「4. あてはまる」から「0. あてはまらない」の5段階で回答を求めた。

3) 大学進学理由および現在の在学理由

あなたが大学に進学しようとしたのはなぜか
「1. 教養・視野の拡大」「2. 人格形成」「3. 専門知識・技術の習得」「4. 学問探求」「5.

就職に有利」「6. 就職に必要な勉強」「7. 将来の安定した生活」「8. 結婚に有利」「9. 青春を楽しむ」「10. 課外活動」「11. 皆がいくから」「12. 家族が勧める」「13. 先生が勧める」「14. 特に理由はない」「15. その他」の15の選択肢の中から回答を求めた。また、現在あなたが在学理由として重視しているものはなにか、についても同じように回答を求めた。

4) 1年で成長したこと

4年次の1年間でどのような点が成長したと思うか、またそれは何によって培われたのか、自由記述で回答を求めた。

また、「コミュニケーション能力」「人間関係形成能力」「自己管理能力」「課題に対応する能力」の4つの能力に関して、「1. 成長した」、「2. 変わらない」、「3. 成長しなかった」の3件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 自我同一性地位判定尺度について

自我同一性地位判定尺度項目12項目を4項目ずつ合計し、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入への希求の3変数の4年進級時と4年卒業時の2時点での平均得点 (SD) を算出し表2に示した。

表2 自我同一性地位判定尺度3下位尺度得点

	進級時 平均(SD)	卒業時 平均(SD)
現在の自己投入	16.52 (3.68)	16.78 (3.83)
過去の危機	17.18 (2.81)	18.69 (2.99)
将来の自己投入	17.04 (2.51)	16.89 (2.76)

下位尺度において t 検定を行ったところ、「過去の危機」($t(72) = -2.59, p < .05$) で4年進級時と4年卒業時に有意な差がみられた。

「過去の危機」は、進級時17.18、卒業時18.69と卒業時に平均得点が高くなった。「過去の危機」は、『(逆) 私はこれまで、自分について自

主的に重大な決断をしたことはない』『私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということを、かつて真剣に迷い考えたことがある』『(逆) 私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない』『私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持たなくなったことがある』の4項目からなる。就職活動や国家試験を乗り越える中で、親や周囲の期待する生きた方に疑問を感じたり、自分の生き方を考え直したりする経験があったのだろうと考えられる。

「現在の自己投入」は進級時から卒業時に平均得点がやや高くなり、反対に「将来の自己投入の希求」においては、進級時から卒業時に平均得点がやや低くなった。「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」の進級時と卒業時に有意な差はみられなかった。「将来の自己投入の希求」の平均得点がやや低くなったのは、項目の中に『私は一生懸命にうちこめるものを積極的に探し求めている』『私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている』等があり、進級時には将来のために行っていたことが、就職活動や国家試験等を乗り越え将来の方向性がある程度決定したことにより、これらの経験が「過去の危機」得点につながったことが示唆される。

表3 自我同一性地位判定尺度

	進級時		卒業時	
	度数	%	度数	%
同一性達成	7	(9.6)	6	(8.2)
権威受容	4	(5.5)	4	(5.5)
A-F中間	6	(8.2)	9	(12.3)
積極的モラリアム	7	(9.6)	4	(5.5)
同一性拡散	6	(8.2)	6	(8.2)
D-M中間	43	(58.9)	44	(60.3)

次に、加藤 (1983) の分類にしたがって自我同一性地位の判定を行った。その結果として、

進級時と卒業時の2時点の自我同一性地位を表3に示した。進級時と卒業時ともに「D-M中間地位」が全体の半数以上を占め、「権威受容地位」と「同一性拡散地位」が5~10%前後を占める結果は、加藤(1983)と同様な傾向がみられた。

「同一性達成地位」は進級時に7名から卒業時に6名の1名減り、「権威受容地位」は進級時に4名から卒業時に4名と変わらず、「A-F中間地位」は進級時に6名から卒業時に9名と3名増え、「積極的モラトリアム地位」は進級時7名から卒業時に4名と3名減り、「同一性拡散地位」は進級時6名から卒業時6名と変わらず、「D-M中間地位」は進級時43名から卒業時44名に1名増えていた(伏見ら¹⁰⁾, 2017)

そこで、進級時から卒業時における変化を詳しくみるために、進級時から卒業時に自我同一性地位に変化のあった者を表4に示した。進級時から卒業時に自我同一性地位が変化していたものは25名であり、残りの48名は進級時と卒業時が同様であった。現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている「積極的モラトリアム地位」から、1年間で多くの経験を経て、今後「同一性達成地位」になることが予測される過去に中程度の危機を経験した上で現在高い水準の自己投入を行っている「A-F中間地位」へ移行している者が多くみられた。一方で、過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている「同一性達成地位」から現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い「同一性拡散地位」への変化もみられた。このことから、自我同一性地位がライフイベントごとに変化する可能性が伺えた。この1年でのライフイベント(目標、嬉しかったことやつらかったこと等)との関連については、

井森⁸⁾(2018)を参照。

表4 進級時と卒業時における自我同一性地位

進級時	卒業時	人数
同一性達成地位	権威受容地位	1
	D-M中間地位	1
	同一性拡散地位	1
権威受容地位	A-F中間地位	1
	D-M中間地位	1
A-F中間地位	同一性達成地位	1
	D-M中間地位	3
積極的モラトリアム地位	同一性達成地位	1
	A-F中間地位	4
	D-M中間地位	1
D-M中間地位	権威受容地位	1
	A-F中間地位	1
	積極的モラトリアム地位	3
同一性拡散地位	同一性拡散地位	2
	D-M中間地位	3

2. SPSI-R について

(1) 進級時と卒業時の2時点における SPSI-R 社会的問題解決に関する尺度である中澤ら⁵⁾(2007)による SPSI-R (合理的問題解決 19項目(RPS)、否定的問題定位9項目(NPO)、衝動/不注意型問題解決4項目(ICS)、回避的問題解決4項目(AS)、肯定的問題定位3項目(PPO))の合計39項目を用いた。SPSI-R 下位尺度平均得点(SD)を算出し表5に示した。大学生677名を対象とした中澤ら⁵⁾(2007)の研究では、下位尺度の平均得点(SD) 合理的問題解決(RPS; 2.47 (.69))、否定的問題定位(NPO; 2.31 (.89))、衝動/不注意型問題解決(ICS; 2.06 (.97))、回避的問題解決(AS; 1.69 (.91))、肯定的問題定位(PPO; 2.50 (.95))であり、その結果と比較すると進級時卒業時ともに否定的問題定位(NPO)、衝動/不注意型問題解決(ICS)が若干低く、卒業時の回避的問題解決(AS)は若干低く、肯定的問題定位(PPO)は若干高い傾向がみられた。また、中澤ら(2007)では性差の検討を行い否定的問題定位(NPO)では男性よりも女性が、衝動/不注意型問題解決(ICS)と回避的問題解決(AS)では女性よりも男性の得

点が高い傾向がみられている。本研究では対象者を女性のみとしているため性差の検討はできないが、中澤ら (2007) の平均得点と比較すると衝動／不注意型問題解決 (ICS) と回避的問題解決 (AS) は若干低い傾向がみられた。しかしながら、女性の方が高い傾向がみられるはずの否定的問題定位 (NPO) も若干低い傾向がみられた。

表5 SPSI-R下位尺度平均得点

	SPSI-R下位尺度平均得点	
	進級時	卒業時
RPS	2.44 (.55)	2.51 (.49)
NPO	2.19 (.84)	2.17 (.74)
ICS	1.90 (.77)	1.89 (.85)
AS	1.60 (.70)	1.46 (.68)
PPO	2.58 (.64)	2.76 (.72)

下位尺度において t 検定を行ったところ、「肯定的問題定位 (PPO)」 ($t(72) = -2.26, p < .05$) で有意な差がみられた (伏見ら, 2017¹⁰)。肯定的問題定位は、『難しい問題に直面している時、一生懸命やれば自分でそれを解決できると信じている』等の項目であり、進級時から卒業時の1年間に難しい問題に直面しても、自分でそれを解決できると信じられるようになり、肯定的に捉えることができるようになっていたことが示された。合理的問題解決 (RPS)、否定的問題定位 (NPO)、衝動／不注意型問題解決 (ICS)、回避的問題解決 (AS) の4下位尺度においては、有意な差はみられなかったが、合理的問題解決 (RPS) のプラス側

面の平均得点は高くなり、否定的問題定位 (NPO)、衝動／不注意型問題解決 (ICS)、回避的問題解決 (AS) のマイナス側面の平均得点が低くなる傾向がみられた。

(2) 自我同一性判定地位による SPSI-R

表4の自我同一性判定地位別 (卒業時) に、社会的問題解決に関する尺度である SPSI-R (合理的問題解決 19項目 (RPS)、否定的問題定位 9項目 (NPO)、衝動／不注意型問題解決 4項目 (ICS)、回避的問題解決 4項目 (AS)、肯定的問題定位 3項目 (PPO)) の平均得点を算出し表6に示した。

同一性地位による SPSI-R の下位尺度得点の差を検討するために、分散分析を行ったところ、「合理的問題解決 (RPS)」 ($F(5, 67) = 3.21, p < .05$)、「回避的問題解決 (AS)」 ($F(5, 67) = 2.78, p < .05$) に有意な群間差がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、「合理的問題解決 (RPS)」ではA-F中間地位と同一性拡散地位、「回避的問題解決 (AS)」では権威受容地位と同一性拡散地位との間に有意な差がみられた。同一性拡散地位群は、A-F中間地位群と比べて「合理的問題解決 (RPS)」得点が低く、権威受容群と比べて「回避的問題解決 (AS)」得点が高いことが示され、積極的に問題解決に取り組むよりも、問題自体を避ける方略をとる傾向がみられた。

表6 同一性判定地位別のSPSI-R(卒業時)

	RPS		NPO		ICS		AS		PPO	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
同一性達成地位	2.72	(.14)	2.17	(.57)	1.71	(.53)	1.13	(.52)	3.06	(.68)
権威受容地位	2.57	(.31)	1.31	(.42)	1.50	(.61)	0.75	(.41)	2.75	(1.37)
A-F中間地位	2.93	(.51)	1.99	(.75)	2.08	(1.00)	1.14	(.53)	3.04	(.57)
積極的モラトリアム地位	2.50	(.52)	2.31	(.95)	1.88	(.92)	1.38	(.95)	2.83	(.33)
同一性拡散地位	2.04	(.67)	2.65	(.96)	2.13	(.85)	1.96	(.80)	2.06	(1.06)
D-M中間地位	2.45	(.44)	2.22	(.69)	1.89	(.89)	1.57	(.64)	2.75	(.63)

表7 進学理由

	人数 (%)
教養・視野の拡大	19 (26)
人格形成	0 (0)
専門知識・技術の向上	21 (28.8)
学問探求	5 (6.8)
就職に有利	6 (8.2)
就職に必要な勉強	6 (8.2)
将来の安定した生活	6 (8.2)
結婚に有利	0 (0)
青春を楽しむ	3 (4.1)
課外活動	0 (0)
皆がいくから	4 (5.5)
家族が勧める	0 (0)
先生が勧める	0 (0)
特に理由はない	3 (4.1)
合計	73 (100)

表8 現在重視していること

	人数 (%)
教養・視野の拡大	18 (24.7)
人格形成	1 (1.4)
専門知識・技術の向上	33 (45.2)
学問探求	4 (5.5)
就職に有利	4 (5.5)
就職に必要な勉強	5 (6.8)
将来の安定した生活	2 (2.7)
結婚に有利	0 (0)
青春を楽しむ	4 (5.5)
皆がいくから	0 (0)
家族が勧める	0 (0)
先生が勧める	0 (0)
課外活動	1 (1.4)
特に理由はない	1 (1.4)
合計	73 (100)

3. 大学進学理由および現在重視していること

(1) 大学進学理由および現在の在学理由

あなたが大学に進学しようとしたのはなぜか「1. 教養・視野の拡大」「2. 人格形成」「3. 専門知識・技術の習得」「4. 学問探求」「5. 就職に有利」「6. 就職に必要な勉強」「7. 将来の安定した生活」「8. 結婚に有利」「9. 青春を楽しむ」「10. 課外活動」「11. 皆がいくから」「12. 家族が勧める」「13. 先生が勧める」「14. 特に理由はない」「15. その他」の15の選択肢の中から回答を求めた。進学理由を表7に示した。大学に進学した理由として、専門知識・技術の向上が多かった。特に理由もなく進学を考えた者がいる一方で、結婚に有利という選択肢を選ぶ者はみられなかった。

また、現在あなたが在学理由として重視しているものはなにか、についても同様に回答を求めた。現在重視していることを表8に示した。現在重視していることとしては、専門知識・技術の向上が多く、進学理由とはほぼ同様な結果がみられた。結婚に有利の選択肢は進学理由と同様に選ぶ者はみられなかった。

(2) 自我同一性判定地位による進学理由および在学理由

卒業時点の自我同一性地位で同一性達成地位と判定された6名、同一性拡散地位と判定された6名計12名の進学理由と現在の在学理由を表9に示した。

同一性達成地位群には、進学理由・在学理由

表9 自我同一性地位による進学理由と在学理由

卒業時	進学理由	在学理由
同一性達成地位	学問探求	課外活動
	就職に有利	専門知識・技術の向上
	専門知識・技術の向上	教養・視野の拡大
	教養・視野の拡大	教養・視野の拡大
	就職に必要な勉強	就職に必要な勉強
	専門知識・技術の向上	専門知識・技術の向上
同一性拡散地位	皆がいくから	就職に必要な勉強
	専門知識・技術の向上	人格形成
	就職に有利	就職に必要な勉強
	教養・視野の拡大	教養・視野の拡大
	特に理由はない	就職に有利
	将来の安定した生活	就職に有利

ともに、専門知識・技術の向上や教養・視野の拡大との理由が多くみられ、同一性拡散地位群には、皆がいくからや特に理由はない等の自分自身の知識の獲得とは違う理由がみられた。また、同一性拡散群には進学理由・在学理由ともに、就職に関係する理由が多くみられた。

4. 1年間の成長

(1) 1年間の成長について

1年間で成長した点があるか、自由記述で回答を求めた。自由記述から、成長した、成長しなかったに分類し、その結果を表10に示した。73名中66名がこの1年で成長したと回答し、成長しなかったと回答したのは2名であった。自由記述に記入がみられなかった者に関しては、不明に分類をした。90%以上の学生がこの1年で自己の成長を感じていることが示された。この1年での成長がなかったと回答した2名について進級時と卒業時の自我同一性地位を検討すると、1名は進級時A-F中間地位から卒業時D-M中間地位、1名は進級時卒業時ともに同一性拡散地位であった。この2名は、現在低い水準の自己投入を行い、将来の自己投入の希求の水準も弱い段階であり、この1年での経験を糧に何らかの成長を感じられていたならば、現在の自己投入や将来の自己投入の希求が高くなった可能性も考えられる。

表10 1年間で成長したかどうか

	人数 (%)
成長した	66 (90.4)
成長しなかった	2 (2.7)
不明	5 (6.8)
合計	73 (100)

また、表10で成長したと回答のあった66名について、成長した点は何によって培われたのかを自由記述の内容から分類した。分類については、「1 国家試験・勉強・実習」「2 就職活

動」「3 アルバイト」「4 周囲の人々」「5 自己の姿勢」の5つである。この1年で成長した点は何によって培われたのかについては、国家試験勉強・勉強(大学の授業等)・実習が多く、それによりコツコツと課題に取り組むこと、継続する力がついたとの回答が多かった。次に就職活動が多く、それにより行動力がついたとの回答が多かった。周囲の人々では、親や先生も含まれていたが友人が大半を占め、その多くが同じ目標を持ち共有することで成長することができたとの回答が多くみられた。自己の姿勢では、努力することや自分に自信がついたとの回答が多くみられた。アルバイトでは接客を通してコミュニケーション能力が成長したとの回答がみられた。

表11 成長が何によって培われたのか

	人数 (%)
国家試験勉強・勉強・実習	29 (43.9)
就職活動	13 (19.7)
アルバイト	3 (4.5)
周囲の人々	11 (16.7)
自己の姿勢	10 (15.2)
合計	66 (100)

次に、「コミュニケーション能力」「人間関係形成能力」「自己管理能力」「課題に対応する能力」の4つの能力に関して、この1年で成長したかどうか、それぞれについて回答を求めた。その結果を、表12から表15に示した。全ての能力において、約70%以上の学生が成長したとの回答がみられた。表10のこの1年で成長した点の自由記述においても、コミュニケーション能力の成長は多くの回答がみられた。

(2) 成長によるSPSI-R平均得点

表12から表15に示した「コミュニケーション能力」「人間関係形成能力」「自己管理能力」「課題に対応する能力」の4つの各能力に関して、

表12 コミュニケーション能力

	人数 (%)
成長した	62 (84.9)
変わらない	10 (13.7)
成長しなかった	1 (1.4)
合計	73 (100)

表13 人間関係形成能力

	人数 (%)
成長した	59 (80.8)
変わらない	11 (15.1)
成長しなかった	3 (4.1)
合計	73 (100)

表14 自己管理能力

	人数 (%)
成長した	48 (65.8)
変わらない	20 (27.4)
成長しなかった	5 (6.8)
合計	73 (100)

表15 課題に対応する能力

	人数 (%)
成長した	54 (74)
変わらない	13 (17.8)
成長しなかった	6 (8.2)
合計	73 (100)

成長した群と成長しなかった群に分け、卒業時のSPSI-R（合理的問題解決 19項目（RPS）、否定的問題定位 9項目（NPO）、衝動／不注意型問題解決 4項目（ICS）、回避的問題解決 4項目（AS）、肯定的問題定位 3項目（PPO））の平均得点（SD）を算出した。その結果を表16に示した。なお、今回の検討では各能力の質問に成長したと回答した者を成長した群、変わらない、成長しなかったと回答した者を成長しなかった群とした。

成長した群と成長しなかった群を比較すると、「合理的問題解決（RPS）」、「肯定的問題定位（PPO）」では、コミュニケーション、人間

関係形成能力、自己管理能力、課題に対応する能力の全てにおいて、成長した群の平均値が高い傾向がみられた。「否定的問題定位（NPO）」、「回避的問題解決（AS）」では、コミュニケーション、人間関係形成能力、自己管理能力、課題に対応する能力の全てにおいて、成長した群の平均値が低い傾向がみられた。「衝動／不注意型問題解決（ICS）」では、自己管理能力、課題に対応する能力において、成長した群の方が平均値が低い傾向がみられた。

各能力の成長によるSPSI-Rの下位尺度得点の差を検討するために、*t*検定を行ったところ、コミュニケーション能力の成長「合理的問題解

表16 各能力におけるSPSI-R

	コミュニケーション		人間関係形成能力		自己管理能力		課題に対応する能力	
	成長した	成長しなかった	成長した	成長しなかった	成長した	成長しなかった	成長した	成長しなかった
<i>N</i>	62	11	59	14	48	25	54	19
RPS	2.56 (.45)	2.18 (.60)	2.55 (.44)	2.31 (.63)	2.59 (.42)	2.35 (.58)	2.62 (.42)	2.19 (.54)
NPO	2.11 (.71)	2.56 (.83)	2.13 (.73)	2.37 (.75)	2.07 (.71)	2.37 (.75)	2.15 (.77)	2.25 (.66)
ICS	1.91 (.89)	1.82 (.63)	1.98 (.82)	1.52 (.92)	1.78 (.84)	2.12 (.86)	1.82 (.83)	2.11 (.90)
AS	1.42 (.67)	1.68 (.71)	1.44 (.64)	1.55 (.85)	1.36 (.63)	1.65 (.75)	1.31 (.62)	1.87 (.70)
PPO	2.84 (.66)	2.27 (.89)	2.85 (.70)	2.38 (.73)	2.81 (.67)	2.65 (.81)	2.78 (.72)	2.68 (.73)

決 (RPS)』 ($t(71) = 2.50, p < .05$)、「肯定的問題定位 (PPO)』 ($t(71) = 2.50, p < .05$)、人間関係形成能力の成長「肯定的問題定位 (PPO)』 ($t(71) = 2.23, p < .05$)、課題に対応する能力の成長「合理的問題解決 (RPS)』 ($t(71) = 3.49, p < .01$)、「回避的問題解決 (AS)』 ($t(71) = 3.25, p < .01$) に有意な差がみられた。自己管理能力の成長による SPSI-R 平均得点には有意な差はみられなかった。コミュニケーション能力が成長した群は成長していない群よりも、難しい問題に直面しても解決できると信じる力やできる限り多くの解決策を考える問題解決方略を取ることが示された。人間関係形成能力が成長した群は、問題解決を実行した後、その結果の良くなった点と悪くなった点を検討できることが示された。課題に対応する能力が成長した群は、難しい問題でも避けずに積極的に取り組むことが示された。

まとめと今後の課題

1. 進級時と卒業時の自我同一性地位の変化

進級時と卒業時における自我同一性地位の変化については、表3に示した。進級時から卒業時に自我同一性地位が変化していたものは22名であり、残りの55名は進級時と卒業時が同様であった。進級時から卒業時の1年間で危機を経験し、現在の自己投入や将来の自己投入の希求を高い水準で行っている者もいれば、過去に高い水準の自己投入を行っていたにもかかわらず、現在は低い水準での自己投入しか行っていない者もみられた。これには、ライフイベントと自我同一性地位との関連が示唆された。

2. 自我同一性地位と SPSI-R との関連

自我同一性地位と社会的問題解決に関する尺度である SPSI-R との関連を検討した。同一性

地位による SPSI-R の下位尺度平均得点は、「合理的問題解決 (RPS)」、「回避的問題解決 (AS)」の間に有意な群間差がみられた。「合理的問題解決 (RPS)」では A-F 中間地位と同一性拡散地位、「回避的問題解決 (AS)」では権威受容地位と同一性拡散地位との間に有意な差がみられ、現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いとされる同一性拡散群は問題に取り組む際に、できる限り多くの解決策を考え最善の方法を取ろうと試みるよりも問題を避ける方略を取ることが示唆された。

社会的問題解決に関する尺度である SPSI-R に関しては、米国大学生を対象とした調査では、男性において肯定的問題定位 (PPO) が高く、女性において否定的問題定位 (NPO)、回避的問題解決 (AS) が高い結果が報告されている。そのため、今後対象者を増やして検討していく必要がある。

3. 女子大学生の進学理由および在学理由について

大学に進学した理由としては、専門知識・技術の向上、教養・視野の拡大、青春を楽しむ等の回答が多くみられた。特に理由もなく進学を考えた者がいる一方で、結婚に有利という選択肢を選ぶ者はみられなかった。また、現在重視していることとして専門知識・技術の向上、教養・視野の拡大、青春を楽しむであり、進学理由と同様な結果がみられた。結婚に有利の選択肢は進学理由と同様に選ぶ者はみられなかった。

今回の研究においては、一校の女子大学の学科で行われている。様々な大学、様々な学科において、今後さらに検討していく必要がある。

4. この1年での成長について

この1年での成長に関しては、90%以上の学生が自己の成長を感じていることが示された。成長については、国家試験勉強・勉強（大学の授業やゼミ）・実習、就職活動が多くを占めそれにより継続する力や行動力がついたとの回答がみられた。周囲の人々からの影響では、友人と共通の目標を持つことで、それを共有し助け合うことでお互いに高め合うことができたとの回答がみられた。今回の対象大学、学科では半数の学生が実習を経験し、国家試験に向けてグループで学習する機会が多くみられる。自由記述からもわかるように、自分で考えたり、友達と話し合ったりする中で、将来に向けて自分に必要なことを取捨選択し、探索している傾向がみられた。これに関しても、様々な大学、学科において検討していく必要がある。

各能力に関しては、コミュニケーション能力では、「合理的問題解決（RPS）」、「肯定的問題定位（PPO）」、人間関係形成能力の成長では「肯定的問題定位（PPO）」、課題に対応する能力の成長では、「合理的問題解決（RPS）」、「回避的問題解決（AS）」に成長した群と成長しなかった群に有意な差がみられた。コミュニケーション、人間関係形成能力、自己管理能力、課題に対応する能力の自己成長を感じている者は、同時に社会的問題解決能力も成長していることが示唆された。

付記

調査にご協力いただきました皆様に感謝いたします。

文献

- 1) Ericson, E. H. 1959 Identity and the Life Circle. 小比木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠心書房
- 2) Ericson, E. H. 1959 Childhood and Society, W. W. Norton
- 3) Marcia, J. E. 1966. Development and validation of ego identity status. J. Personal. Soc. Psychol., 3, 551-558.
- 4) 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302
- 5) 中澤潤・榎本淳子・中道圭人 2007 社会的問題解決が大学生の適応に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要第55巻, 61-69
- 6) Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development In P. B. Baltes, D. L. Featherman&R. M. Lerner (Eds.) Life-span development and Behavior, Vol. 10 Hillsdale, NJ : Erlbaum. 1-27
- 7) Armsden, G., &Greenberg, M. T. 1987 The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relation to psychological well-being in adolescence. Journal of Youth and Adolescence, 16, 427-454.
- 8) 井森澄江・伏見友里 2018 就職活動を通じた女子大学生のキャリア発達 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 18
- 9) D' Zurilla, T. J., Nezu, A. M., & Maydeu-Olivares, A. 2002 Social Problem-solving inventory-revised (SPSI-R). New York : MHS
- 10) 伏見友里・井森澄江 2017 大学後期の親準備性と大学生生活(3)日本パーソナリティ心理学会第26回大会論文集

Abstract

The purpose of this study was to explore the identity status of college students, and to investigate the relationship between identity status and social problem-solving.

We surveyed 73 students enrolled at a women's university through the questionnaire covering a face sheet, Identity Status, SPSI-R (Social Problem-Solving Inventory-Revised), QOSL (Quality of Student Life). The promotion time of the university last grade and twice questionnaire when graduating, were put into effect to consider growth for 1 year.

Results indicated that 44 (60.3%) of the 73 participants were judged to be in the D-M intermediate position. With respect to the SPSI-R, there was a significant difference between the AF intermediate position and the identity diffusion position in Rational Problem Solving (RPS).

There were 25 people whose identity status had changed at the time of graduation and graduation of the university fourth grader, the remaining 48 did not change.

The students into which the identity status was changing from the promotion time to the time of graduation were 25, and the promotion time and the graduation time had similar result in 48 people. The possibility that the identity status changed at every life event was in this way suggested.

Keywords : Identity Status, Female students, SPSI-R (Social Problem Solving Inventory-Revised)